

決済スキームの発展と資金決済システム

全国銀行協会 吉田 康志

銀行間の資金移動を専門的に取扱う資金決済システムは、現代の銀行制度において極めて重要な役割を担っている。これは、今日の経済活動において、主要な支払手段が銀行の負債である預金通貨だという事実と密接に関係している。つまり、預金通貨を直接に支払手段とする振込や自動引落だけでなく、手形・小切手、クレジットカード、デビットカード、電子マネー等においても、決済の部分は結局のところ銀行の預金通貨によって行われるのであり、さらに、この支払・決済が異なる銀行の間で行われる場合には、その取引のほとんどは必ず決済システムを介して処理されるということである。

現在運営されている銀行間の決済システムでは、多数の銀行が同一の決済制度に参加し、参加者相互間での取引が可能な形となっている。しかし、歴史的には、今あるような形態の決済システムが現れたのは比較的最近のことであり、それより前には、資金移動は二つの銀行が相対で個別に契約を取り結ぶ方式を中心に行われてきた。つまり、資金移動を実現するためのアレンジメントは、当初は二者間の決済方式によって行われ、その後、ある時期以降からは多者間の方式に重心が移ってきたということになる。こうした決済方式の変遷の背景には、どのような要因があったと考えられるだろうか。

そこで本稿では、決済の手続きにおける二者間スキームと多者間スキーム（ネット決済システム）を比較し、その特徴と決済システムとの関係について検討を行った。その結果、事務処理面ならびに流動性管理において多者間スキームが優れていることが明らかになった。そして最後に、多者間スキームとしての決済システムにおいて留意すべき事項として、ネットワーク外部性およびリスクの集中について指摘した。

以上